3月の行事報告　March

宿縁廟法要と春季彼岸会法要に出席して

3月20日(日)は、晴天に恵まれ春本番の一日でした。　11時、壮年会有志10名ほどが集まり、宿縁廟前に机、椅子を、聞法会館に椅子を並べました。

午後1時から宿縁廟法要です。今年は14家の方々が新たに納骨されました。住職は、「見遇」(対面すること)と「聞遇」(離れた方の想いや願いと遇うこと=お念仏の世界、亡き方と遇える世界)についてお話になりました。

1時30分から春季彼岸会法要です。　お勤めは仏説阿弥陀経で、また前住職の歌唱指導で讃仏歌「いのち」を皆さんと唱和しました。

法話は、講題「共に救われる道」で前住職がお話しになりました。「現代は、無縁の時代から避縁社会といわれているが、仏教ではすべて有縁であり縁のなかで生きている。

“共生”といわれて久しいが、親鸞聖人は“御同朋”といわれた。　つまり皆同じく等しい仲間、仏様から頂いた命を共に生きるという世界を示された。“心を弘誓(ぐぜい)の仏地に樹(た)て”(『教行信証』後序)=如来様の教えを説く場にこころをたたせて頂く=ということだ。

お念仏は仏の願い、想いがこめられたもので、お念仏は必ず残り伝わっていく。愚かな私に働いているのだ。」

住職は、昨年から花粉症がひどくなったようですが、下記のようなご挨拶をされました。

「孫正義氏(ソフトバンク)は通信事業をつうじて孤独な人を減らしたいと言っていたが、LINEでは即返事をしないと仲間はずれになってしまうので、それが強迫観念になっているとのことだ。皆がつながっているという便利なものが苦しみの原因になっている。　心がつながっていない現代は大切なものを忘れているのではないか」

後片付けが終わり、前住職、前坊守、住職、坊守をまじえ、壮年会有志は、ウーロン茶、ノンアルコールビール、ビール、焼酎、お酒、ウイスキー等々をいただきながら楽しい一時を過ごしました。皆様も是非ご参加下さい。合掌

平成28年度、中原寺仏教壮年会活動について

平成28年度の年次総会におきまして、出席者全員の承認を受け、今年度の目標と方針に沿って活動をしてまいりたいと思っております。

会長就任5年目に入り、会員の皆様にご満足頂けるよう努力して参る所存ですのでよろしくお願いいたします。

今年度は婦人会との交流事業を念頭に合同法座時にカラオケ交流会を、年二回取り入れて参りたいと事業計画に掲げております。

5月には中原寺杯グラウンドゴルフ親睦大会を企画しておりますので、奮っての参加をお待ちしております。

他寺親睦に於いても、昨年天真寺さんのご門徒さんと交流事業として「グランドゴルフ」を実施しました。今年の秋にもまた天真寺さんとの交流グラウンドゴルフも企画をしておりますので、多くの方の参加を頂ければと思います。

今年度も壮年会行事・中原寺行事等に一人でも多くの参加をお願い致します。

会員の皆さまにおかれましては、健康に十分留意をして頂き、ぜひ暇を見つけてお寺に足を運んで頂ければと願う次第です。

合掌

(石井　保 記)

ワンポイント解説

■降誕会(ごうたんえ)とは?

「4月8日の釈尊の誕生を祝って行う法会」のことで、灌仏会(かんぶつえ)、仏生会(ぶっしょえ)、花祭ともいう。日本では、種々の草花で飾った「花御堂(はなみどう)」を作り、中に潅仏桶をおいて甘茶を入れ、中央に誕生仏を安置してひしゃくで甘茶をかける。釈尊誕生の時「竜が天からやってきて香湯をそそいだ」という話に基づくもので、甘茶は産湯に相当する。　東南アジア等の南伝仏教(上座部仏教)では、「ウェークサ祭」として4～5月の満月の日を中心に数日間行われる。この満月の日に釈尊は、生まれ、悟って仏となり、死んだとされ、この時期は寺院参拝のほかに、屋外での釈尊の絵巻物や大提灯行列、歌と踊りなどが賑やかに行われる。

(参考:「岩波仏教辞典第二版」2010年11月)

感話シリーズ-18

東京教区仏教壮年会連盟 第36回結成記念日研修会に参加して

2月21日(日)・22日(月)、一泊二日の研修に参加させていただきました。テーマは「親鸞聖人の足跡」で今井雅晴筑波大学名誉教授の歴史学から見た親鸞聖人の足跡を伺いました。歴史学とはその時の社会状況・慣行・常識など時代背景を踏まえたうえでの、新たに発見された資料からの分析であり、刻一刻と歴史が変わっていくというものだそうです。

講演の内容は

「親鸞は35歳のとき、法難に会い京都から流されて、とぼとぼと雪の降りしきるなか、一人やっとの思いで越後までたどり着いたという印象があるが、本当はどうだったのか?　流罪といえども、当時、阿弥陀信仰は貴族の間では圧倒的な力があり、阿弥陀浄土を願う念仏を弾圧するなどありえないことで、社会風俗を乱すという治安の面からの処分でしかなく、貴族は流されてもあくまで待遇は変わらず、数年で元の官位のまま戻されるのが常であった。まして、当時、実家の日野家の親戚が越後の国の偉い役人に転勤しており、流刑の地の決定についても何らかの手心が加えられた可能性がある。したがって道中でもきちんと見届け人がついてきており食料・宿舎等ある程度の待遇が保証されていた。また越後においても、高い地位を保っていたはずで、道を歩けば村の者が先に頭を下げる存在であった。まして、越後から関東に移動するについても、食うや食わずなどではなく関東一番の豪族が丁重にお迎えしたというのが自然である。私たちは親鸞の生活の貧しさのご苦労をおもっているかもしれないが、何よりも何年もおひとりで勉強することこそどれだけ大変であったか知るべきである。比叡山で何年も多くのものと修業し、法然さんとも100人以上の多くの兄弟弟子と研鑽されてきたのだ。

恵信尼については内助の功大といわれるが、彼女は三善家の公家の娘で、家は学問関係を司る偉い役人だったことが分かっている。当時の社会も今と変わらず地位は金とコネであり、どこにどうすれば道が開けるかを恵信尼は熟知していたものと思われる。当時関東でも専修念仏は先端知識であり、有力者の間にも知られていた。

そのなかで人的ネットワークを構築することに成功した親鸞は関東一円を歩き廻っていた。ほとんど武士が相手であり、彼らが信徒の主なるものであることが分かっている。結果、権力者である北条家とも分け隔てなくお付き合いしていたはずで、その関係で北条政子の年回法要のための一切経校合(一切経5800巻位を書き写し奉納すること)の仕事も依頼されたと考えられる。またご夫婦で明るく門徒の方たちに接する様は、人々に実感として幸せな生活・念仏者の喜びを感じさせたのではないだろうか。多くの地元信仰とも共存して、ご夫婦で多くの方々を魅了することができてこそ皆さんがついてきたのであって、特別な法話などなかったのではないか。それがのちに善鸞の勇み足を生んだ可能性がある。カリスマ性のない息子は何を話しても指導力を持つことができず、これまでの自分の教え方を反省した親鸞は再び筆をとったのではないか。そのため生涯にわたる著作のなかの62%を82歳から85歳という高齢にもか かわらず書かねばならなかったのかもしれない。」

よくある親鸞さんの像をみると難しい顔をしていて、厳しい旅から旅を法一筋に歩んでこられたように思っておりましたが、当時皆さんに教行信証の講義をされたわけでもないでしょうし、他の信仰と争ったわけでもありません。

夫婦揃った念仏者の楽しそうな生活が皆さんを虜にしたのかもしれません。これからのお寺は社会にとっても大切なことのように思われます。「聖道の諸教は行証久しく廃れ、浄土の真宗は証道今盛りなり」といわれたのもご自身に自信がおありになったことと思います。いまは、教団は盛りかもしれませんが証道(生きた証し)はなかなかお寺に行ってもめぐり合えないのではないでしょうか?

(越田 修二郎 記)